

ジッド＝リストの『経済学史』

—世紀転換期における経済学観の変容—

栗田啓子

はじめに

「経済科学の観点から見て、ある重要な出来事が起こったことに言及せずに、我々は 1909 年を過去に送り、ただちに 1910 年が始まるかのように扱うことはできない。……1909 年 5 月にパリのラローズ＝テナン社から『経済学史—フィジオクラートから現代まで—』が出版されたのである。これはまれに見る重要な著作だと思われる」(Léon Walras, 1910)。

レオン・ワルラスは、逝去の直前に『ガゼット・ド・ローザンヌ』に送った原稿に、こう記している。ジッドとワルラスの友好関係を考えると、ワルラスのこの評価が儀礼的なものであった可能性も否定できないが、それでも、ジッド＝リストの『経済学史』が長期間にわたってフランス語圏の標準的な経済学史のテキストになり、9 カ国で翻訳されたほど高い評価を受けていることは事実である。

本報告では、このジッド＝リストの『経済学史』を取り上げ、経済学史研究の意義と社会的役割を考察することにしたい。まず、1 でジッド＝リストの『経済学史』が誕生した歴史的背景を概観し、2 で二人の著者の略歴と執筆の姿勢を確認することにしたい。3 では、フランスの経済学史としての固有の特徴があるのか、また、20 世紀初頭の経済学史としての刻印が見いだされるのか、の 2 点を評価基準として、この『経済学史』の内容を分析する。最後に、4 で 19 世紀から 20 世紀にかけての経済学の展開のなかにジッド＝リストの『経済学史』を位置づけることを試みることにしたい。

1. 経済学の制度化と経済学史講義

19 世紀末にフランスで経済学史のテキストの出版が相次いだ背景には、フランスにおける経済学の制度化の進展が存在した。フランスではすでに 1795 年に高等師範学校で正規の経済学講座が開設され、このあと、講座の名称にはそれぞれ違いがあるが、1820 年に工芸学院 (Conservatoire des Arts et Métiers)、1832 年にコレージュ・ド・フランス、1847 年に土木学校と、実質的に経済学を講義する学校が現れた。しかし、大学で経済学が教えられるようになったのは、19 世紀後半に入ってからだった。1877 年によく法学部に経済学講座が導入された

のである。もっとも、経済学博士号については、1903年に「経済学・政治学優等卒業試験」を制度化したイギリスより早く、1895年に「政治・経済科学博士号」が創設されている。そして、この経済学博士号の設置と同時に、すべての法学部に「経済学説史 (histoire des doctrines économiques)」講義の開講が義務づけられたのである。

これら法学部の経済学講座は、コレージュ・ド・フランスを代表とするパリの自由主義的な経済学とは異なった特徴を持っていた。保護主義を主張する経済学者とともに、19世紀末から力を持ち始めた「社会経済 (économie sociale)」に関心を持つ経済学者たちが法学部の経済学講座を担当したのである。彼らは、自由主義的な『エコノミスト誌 (Journal des économistes)』(1841年創刊)に対抗して、多様な立場の論考を取り上げる『政治経済学雑誌 (Revue d'économie politique)』を1877年に創刊している。法学部における経済学講座の設置には、このような経済学の方向性をめぐる対立が影響していたのである。「経済学説史」講座も、多様な経済学のあり方を確認し、自由主義経済学による一元的な支配の見直しを促すという役割を担っていたと言えるだろう。こうして、ジッドとリストが「フランスでは経済学教育において、学説史に対してほかの国々と比べものにならないほど重要な地位を与えられている」(Gide et Rist, 2000)というような状況が生みだされたのである。

一方、経済学史に与えられた重要性は、もうひとつの要因に支えられていた。その要因とは、法学部という枠組みの中で、初学者に高度な経済理論の教育をする困難さだった。経済学の歴史的展開を追うことによって、経済学の初歩的な知識を習得させようとしたのである。こうして、19世紀末には、法学部の「経済学説史」を担当する講師がつぎつぎとテキストブックを出版することになった。その最高峰というべきものが、ジッド＝リストの『経済学史』だったのである。

2. ジッドとリスト

2-1. ジッド (Charles Gide:1847-1932)

フランスにおける協同組合運動の思想的根幹を築いたと評価されるジッドは、1872年に「宗教的領域におけるアソシアシオンの権利」で博士号を取得している。1874年に教授資格試験に合格した彼はただちにポルドー大学法学部に就任し、1880年に「経済学説史」講座担当者としてモンペリエ工科大学法学部に着任した。1900年には土木学校に迎えられ、これ以降、最終的にコレージュ・ド・フランスの「協同組合」講座の教授にいたる教師生活をパリで送ることになる。『経済学説史』の執筆を決意した1903年には、1884年の初版以降すでに8版を数える『経済学原理』の著者として、また『政治経済学雑誌』の編集者として、経済学界に揺るぎない地位を確保していた。

講義で使うテキストを出版するという意図とともに、ジッドには、フランスにおける経済学教

育としての経済学史の意義を確認するという意味合いがあったように思われる。実際、1890年に *Political Science Quarterly* に “The economic schools and the teaching of political economy in France” を寄稿したのを皮切りに、1896年にパルグレイヴの経済学事典の “French School of Political Economy” の項目を執筆し、1907年には *Economic Journal* に “Economic literature in France at the beginning of the twentieth century” を発表している。これらの論考のタイトルを見てもわかるように、フランス経済学の特質を国際的に認知させようとするのと経済学史教育の重要性を訴えることがジッドにおいては密接に関連していたといえるのではないだろうか。

2-2 . リスト (Charles Rist:1874-1955)

リストは1898年の「フランスにおける成人労働者の生活」と1899年の「労働災害に関するイギリスの立法」の2本の論文で博士号を取得し、1899年に教授資格試験に合格したのち、モンペリエ大学のジッドの「経済学説史」講座を受け継いだ。1903年にはパリ大学法学部教授に任命されたが、第一次大戦中に金融・財政の専門家として知られるようになり、1926年にフランス銀行副総裁に任命されるなど、研究生活と銀行実務のふたつのキャリアを歩むことになった。ジッドが、モンペリエ大学の民法の教授から紹介されたリストを共同執筆者として選んだのは、後任であると同時に、リストがドイツ語に堪能だったからだといわれている。しかしそれにとどまらず、両者がともにプロテスタントであり、ドレフュス擁護派だという共通点があったからではないだろうか。もっとも、高名なジッドに共同執筆者に選ばれたことを名誉に思いながらも、ジッドとの執筆作業はリストにとって容易なものではなかった。『政治経済学雑誌』に発表したリストの「自伝」には、ジッドの執筆がなかなか進まないことに対する不満だけでなく、彼の人物に対する批判まで書かれている (Rist, 1955)。とはいえ、リストの最大の不満は、経済学に対する評価の違いだった。リストはつぎのように回顧している。

「私は、ワルラスとメンガーの著作に我々の本の中心的な地位を与えるように努力し、自分の路線を守ろうとした。これに対してジッドは、彼が信奉する協同組合思想が経済学の到達点であると主張して譲らなかった」(Rist, 1955)。

このような評価の違いを明らかにするため、リストはジッドにそれぞれの担当部分に署名を入れることを要求した。こうして、目次に執筆者名を記載した『経済学史』が誕生したのである。

3 . ジッド = リストの『経済学史』

内容の詳細な分析は報告に譲るとして、ここでは、ジッド = リストの『経済学史』の特徴を大まかにまとめておくことにしたい。第一の特徴は、歴史的な展開にそってはいるものの、基本的に学派ごとの叙述になっている点である。ジッドとリストは序文でこのことを「類縁性を基準と

して学説をひとつの家族と見なしてグループ化し、それらが現れた歴史的順序に従って紹介する (Gide et Rist, 2000) 方法だと説明している。この方法は、一人の経済学者の業績を経時的に追うという当時一般的だったスタイルと比べて、学派のグループングによって読者の理解を容易にしたと好評を博している。しかし、この方法は、個別の経済学者に対する評価と学派に対する評価を前提としなければならなかったはずである。ジッドとリストの執筆時の対立もここに起因しているといえるだろう。とはいえ、評価をめぐる両者の対立があつたにもかかわらず、第二の特徴は、これらの学派をほぼ平等に取り扱っている点である。ジッドとリストも序文で著者や学説を取捨選択していることを認めながら、「この選択にはなんら規範的な意味はない。我々は、道徳性の基準や、社会的有用性の基準、さらには真理の基準でもってさえ、ある学派を推奨し、ほかの学派を退ける意図は全く持っていない」(Gide et Rist, 2000) と強調している。もともと、多様な経済学のあり方を俯瞰するというこの方法は、主流派経済学の独占的な状況を打破するという法学部の経済学史講座の (隠された) 目的に適っていることも確かである。

このように、『経済学史』の叙述から二人の著者の経済学観を把握することは難しい。だが、取捨選択の基準が「正しかろうと間違っていようと、現在受け入れられている思想の形成に貢献した学説、現代思想に直接継承されていった学説に光をあてること」(Gide et Rist, 2000) だとすると、最終巻に取り上げられた学派が彼らの経済学観を推測する手がかりになるはずである。

4. 経済学観の変容

5巻18章からなる初版の最終巻は「最近の学説」というタイトルで、第1章「快樂主義者」、第2章「キリスト教に影響を受けた学説」、第3章「連帯主義者」、第4章「地地理論とその応用」、第5章「無政府主義者」の5章から構成されている。これらの章は、ジッド亡き後の第6版の序文にリストが書いたように、「1870年から1914年にかけての期間を特徴づけるものは、私が見る限り、一方では、均衡と最終的効用というふたつの概念の発見と調琢であり、他方では、長い平和の時期に花開いた社会的学説の隆盛である」(Gide et Rist, 2000) との認識に基づいている。2-2で紹介したジッドとリストの求める新しい経済学像の違いを埋める折衷案といった様相を呈しているといえるが、実際、限界効用概念に基づいた均衡理論と協同組合思想を含む「社会経済学派」が世紀転換期における新しい経済学だったことは事実である。博士論文のタイトルからもわかるように、リストが「社会経済学派」的な立場から均衡理論に傾斜していったのに対して、ジッドは、つぎの引用文に見られるように、均衡理論に理解を示しながらも、「社会経済学派」の立場をより鮮明にしていたといえる。

「最近は旧来のものと区別するために < 純粋経済学 (économie pure) > と呼ぶようになっていたが、経済学 (économie politique) は、とくに、人とモノとの間に成立する自生的で必然的

な関係を効用の観点から研究する学問である。この学問は、それらの関係を発見し、説明すること、さらに、あらゆるほかの要因を捨象して得られたいくつかの要因に帰着させることによって数学的に計算することに努めてきた。その出発点は、< 快楽主義的原則 >、すなわち、最小の努力で最大の満足を獲得しようとする欲求である。……社会経済学 (économie sociale) は人間の幸福を保障するために、自然法則の自由な作用に委ねることがよいとは決して考えない。それは、反対に、意志的で、よく検討され、同時に、合理的で、ある一定の正義という考え方に合致する組織の必要性を信ずる学問である」(Gide, 1920)。

ここには、古い経済学から「快楽主義」に基づく新しい経済学である「純粋経済学」への転換と、その「純粋経済学」から「社会経済学」への転換という、経済学観のダブルの転換が語られている。ジッドにとって、法学部の経済学講座がセイの流れを汲む古い分析方法を固守する自由主義経済学にくさびを打ち込む場だったとすると、『経済学史』は新しい (数学的) 手法を開拓した自由主義経済学に「社会経済学」を対置する場だったのである。フランス随一のワルラス擁護者と言ってもよいジッドは、この二つの経済学が両者とも新しい経済学である事実が重要だと捉えており、単純に対立させることを望んではいなかった。だからこそ彼は、ワルラス理論を高く評価するリストを退けて、第 5 巻の第 1 章「快楽主義者」と第 3 章「連帯主義者」をともに自身で執筆したのではないだろうか。

おわりに

1909 年 4 月 18 日にジッドはワルラスに手紙を送り、近々『経済学史』を送付することを予告している。その書簡の中でジッドは、ワルラスの業績を自分が執筆した「快楽主義者」の章とリストが執筆した「地代理論とその応用」で大きく取り上げたことを報告し、「これは遅すぎる正義の実現」だと述べている。リストも 5 月 17 日に「フランスがあなたに捧げるべきだった敬意を表明することが、(ジッドと) 一緒に仕事をして以来の私たちの変わらぬ関心事でした」とワルラスに書き送っている。ワルラス自身は、10 月 23 日ジッド宛の書簡で、「注意深く、また満足しながら」著作を読んだことを記し、この二つの章が「土地国有化」を正当化していると評価した (Jaffé, 1965)。

こうして、ワルラスの経済学史とジッドとリストの『経済学史』は交錯することになった。しかし、ワルラスの場合とは異なって、講義テキストとしての『経済学史』は自己の理論構築のための道具ではなかった。初習者向けの経済学 (経済学史ではなく) のテキストでもあり、既成の経済学批判の書でもあった。さらに、イギリスとドイツに偏していたものの、外国の経済学を吸収するための手段でもあった。フランス経済学を海外に精力的に紹介したジッドは、逆方向の交流を期待したのである。だが、このような多様な機能をもつジッド = リストの『経済学史』が、

世紀転換期における新しい経済学を確認することを究極の目的としていたことを忘れてはならない。